

二〇二六（令和八）年度

国

語

(60分 120点)

注 意

- 一 試験開始のチャイムが鳴るまで、表紙を開いてはいけません。
- 二 試験開始のチャイムが鳴ったら、まず解答用紙の決められた所に受験番号を書き、問題のページ数をたしかめてから始めなさい。
- 三 問題は二十三ページまであります。ページの不足や乱れがあったら、だまって手をあげなさい。
- 四 印刷のはっきりしていない所があったら、だまって手をあげなさい。
- 五 試験終了のチャイムが鳴ったら、すぐ鉛筆を置き、解答用紙を、表を上にして問題用紙の上に置きなさい。

受 験 番 号

(問題は次のページから始まります。)

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(問題の都合上、一部表記を改めたところがあります。)

冷凍庫につめこまれたアイスのラインナップを見て、風船の空気が抜けるように口の端から笑いがもれた。パピコの「大人の華やか苺味」にサクレのスイカ味、ハーゲンダッツの抹茶&ブラウニー。プロモーション(商品を売るときの宣伝活動)期間が過ぎればすぐに店頭から消えてしまいそうな新フレーバーの商品や、数量限定で販売される季節商品ばかりだ。全部、新しいものの好きの来海が選んだものだった。

「どうしてくうちゃんは期間限定のアイスばかり買うの?」と尋ねたことがある。私は来海とは違って定番の味を好む。だって、期間限定のものを気に入ってしまったら、販売が終わったときに損した気分になる。来海は「お母さんって食に対して保守的だね」と笑っていた。

アイスの山に埋もれていた冷凍ブロッコリーを取り出し、流し台へと向かう。瞬間(しゅんかん)②ここ最近ずっと頭の片隅(かたすみ)に居座り続けていたひとつの問いに対する答えが、ぱつと浮かんだ。――私は、私よりも長生きする話し相手がほしかっただけかもしれない。

「あのー、ちょっとお時間よろしいですか?」

声がした方をふり返れば、キッチンの入口に来海が立っている。寝ぐせのついた柔らかい猫っ毛が、クーラーの風でさらさらゆれていた。

「つかぬことをお伺いしますが」

来海はときどきこんなふうに、わざとかしこまった口調で話しかけてくる。

「何?」

「お母さん、あたしが寝てる間にさあ、あたしのおでこの上に何かものを置いたりした?」

「は?」

来海の顔をまじまじと見つめた。額の真ん中あたりの皮膚に二カ所、へこんでいるところがある。長径が二センチにも満たない

横長の楕円形が二つ、ほとんど間隔を空けずに並んでいて、くつきりとあとになっていた。

朝起きたら枕やシーツのあとが肌に残っていた、なんてことはよくある。でも、この奇妙なあとは何だろう。

「どうしたの、それ」

「あたしもわかんない。朝起きたらこうなってたんだよね」

「おでこつてことは、うつ伏せで寝てた？ 布団で押さえつけられちゃったのかな」

「いや、朝起きたときは仰向けだったよ。これ、何のあとなんだろう」

あごに手を当て、まるで難題を突きつけられた探偵のように考えこんでいる。来海は妙に理屈っぽいというか、どうでもいいことでも真剣にコウサツしたがる節があった。ならば私も真面目に返さなくてはならないだろう。

「おでこめがけてスマホでも落っこしたんじゃない？ くうちゃん、寝る前にスマホ触ってるでしょ」

「昨日の夜は寝落ちる前にちゃんと机の上に置いたもん。それに、スマホの角をおでこにぶつけたって二カ所もへこまないよ。これ、二つ出っ張りがある何かをおでこの上に長いこと置いたあとのように見えるんだけど」

「だからって、『あたしのおでこの上に何か置いた？』ってどんな質問よ。お母さんそんな変なことしないよ」

「ありえないとは思いつつ、一応きいてみました」

「何それ」

言いながら、リビングのテレビ台の上のフィギュアに目をやる。来海が「どうぶつサウナ」というシリーズのガチャガチャを回したときに出てきた、高さ三、四センチほどのペンギンの人形だ。二足歩行の動物らしく自立していて、ちょうど足の裏の部分が二つの出っ張りになっている。たとえばあれが昨夜、来海のおでこのついていたとしたら。

娘の額の上にそっとペンギンを置く自分の姿を想像して、つい笑ってしまふ。来海もつられてふき出した。そしてこの話題にはあきたとばかりに、からつとした声で「まあいいや」と言う。

「てか、今何時？」

「十一時」

「え、まじ？　じゃあ映画は？」

「もうとつくに。お昼の回も、今からじゃ間に合わないね」

「ごめん。でも、夜六時の回もあったよね？」

「夕方はメルとお父さんのお迎えするんでしょ？」

「そうだった。ごめんね、明日香ちゃん」

「明日香ちゃんじゃなくて、お母さんでしょ」

昨夜、「明日朝一」（「朝一番」の省略した言い方）で映画をみにいこう」という話になった。八月頭に封切り（新作映画の公開）されたデイズニ一の最新

作を来海もそれなりに楽しみにしていたはずだが、ほぼ口約束だった。「まあ早起きできたら行ってもいいよね」くらいの。

ようやくのお盆休みだ。母親との外出よりも、惰眠をむさぼる（なまけで眠る）のを優先したくなったのだろうが、来海は「たった今寝過ごしたことに気づいた」かのような表情を自然に作ってみせた。

幼い頃の来海はありのまま、素の姿を私にさらけだしてくれていたけれど、③小学校高学年あたりから私の前で芝居しばいをしたり、気をつかって他人行儀たにぎよな態度を取ったりするようになった。②いい傾向だと思う。

「顔洗ってきなさい。ご飯は？」

「食べる！」

独特のサイドステップ（すばやく足を横に出して移動すること）を踏みながら、洗面所へと向かう来海。その後ろ姿を横目に、こっそりため息をつい

た。やっぱり私は映画行きたかったな、来海と。

来海は明日もあさつても、クラスの友人と遊びに行く。しあさつての十六日からは、塾じゅくの夏期コウシユウが再開するのでまた忙しくなるし、その次の日は私も仕事に出なければならぬ。親子二人で過ごせるのは今日だけだった。

いくら仲の良い母娘おやこであったとしても私たちは別々の人間なのだから、いつまでも植物の根のようにからまり合っているわけに

はいかない。ほぐして切り離して、親子として適切な距離を保てるようにならなければ。でも、心の中で寂しがることくらい許してほしい。

看護師として私大（「私立大学」の省略した言い方）の附属病院で働く私は、今年もお盆期間に夏季休暇をもらっていた。同じ科に所属するスタッフの数には限りがあるので、それぞれタイミシングをずらして休みを取得するのだが、八月中旬の長期休暇は、初盆（その人が亡くなって初めて迎えるお盆）だとか三回忌（その人が亡くなって満二年目に行う法要）だとか、盆の法要が控えている者に優先して割り当てられている。五年前に夫を亡くしてからというもの、私はお盆と真ん中に夏休みをもらうようになった。今年は法要などは特にないので八月でなくもいいのだが、たぶん気をつかわれているのだろう。

まあ、メルの初盆だしちようどいいか。

のんきな鼻歌と、歯をみがく音が洗面所から聞こえてきた。気を取り直して、来海の朝食兼昼食を用意する。といっても、昨夜のカレーの残りを温めるだけだけど。

メルが死んで、我が家のカレーは少しだけおいしくなった。ほとんどのペットにとってネギ科の野菜は毒なので、彼がいたときは玉ねぎをキッチンに持ちこむことさえできなかったのだが、最近では気をつかわずじゃんじゃん使えるようになった。やっぱり、玉ねぎがあるのとなじや全然違う。

メルというのは、うちで飼っていたミニブタ（小型化されたブタで、体重は平均五十キロ。メルは体長一メートルをこえていた）の名前である。去年の秋に死んだ。

（中略）

電子レンジで温め直したご飯にルーをかけて盛りつけたとき、ペタペタと裸足の足音が近づいてきた。

「カレーだあ」

来海の額についていた奇妙なあとは、もうすっかり消えている。肌にハリがある証拠だ。来海が手を合わせて食べ始めたの

で、私もテーブルについた。

「やっぱおいしいよね」

「玉ねぎ？」

「玉ねぎもだけど、このニセお肉」

来海のリクエストで、肉の代わりに大豆ミート（大豆を加工して肉のようにした食品）を入れた。来海はいつからか豚肉を食べなくなった。卵や乳製品はたまに食べているが、最近では牛肉や鶏肉もほとんど口にしない。

口をもぐもぐさせながら席を立つと、来海は冷蔵庫から二リットルペットボトルを抜きとり、残り少なくなっていたお茶をそのまま飲み干した。また背が伸びたようだ。

中学時代、来海は週三のソフトテニス同好会でゆるく楽しく運動していたのに、何を思ったのか高校では強豪のハンドボール部に入った。まだ四カ月しか経っていないが、みるみる身体が引きしまってタテに伸びている。

「昨日の夜ね」

また椅子に座って、カレーをほおばりながら話しかけてくる。

「夏休みの課題、ずっと後回しにしてたやつにそろぼち（「そろそろぼちぼち」を省略した言い方）手つけないとやばいかなって思っ
て。生物のプリン
トやろうとしたんだけど、鞆の中になくて超あせった」

「え、なくしたの？」

「部活バッグの中にあつた。しわくちやになつてたけど」

「ファイルに入るときなさいよ」

「後でちゃんとファイルに入れようって思ってたも、一回別の動作はさんだら忘れちゃうんだもん。もうあきらめてる。チスジだ
から。お父さんに似ちゃったからどうしようもないの」

作り置きにしようと思っていたプロッコリーのソテーにも箸を伸ばす。

「お父さんさあ、あたしが小三のとき家庭ホウモンのプリントなくしちゃったよね。お母さんがめちゃくちやキレて。あれ、結局どこから出てきたんだっけ？」

「お父さんの車の中」

「そうそう。で、プリント頭の上にかかげながら『明日香ちゃん、あったよお』って、半泣きで家の中に入ってきたもんね」
来海が生まれてから、夫は私のことを「お母さん」とか「ママ」とか呼ぶようにしていたが、ときどき「明日香ちゃん」という二人の時の呼び方をしてることがあった。来海がふざけて私の下の名前を呼ぶのは、夫の真似なのだ。

メルは朝の散歩は来海と私が、夕方の散歩は夫が担当していた。メルはいつも散歩を心待ちにしている、朝夕の決まった時間になると、催促するように低い声で鳴いた。

犬用のリード（散歩のために犬の首につけ人がひく綱）をつけてはいたが、犬とミニブタとでは散歩のやり方が変わってくる。引っ張られるのが苦手なメルと歩くためには、私たちが後ろをついていくようにしなければならなかった。足取りが重くなったときはえさをやりながら歩く。おやつがほしいあまり、来海の進行方向をふさぐようにうろちよろすることもあった。

五年前の春のこと。小学五年生だった来海がピアノ教室から帰宅したら、「早く外に連れて行け」とせがむように、メルがぶうぶう鳴いていた。いつもなら、とつくに夫が散歩をスませているはずの時間なのに。

来海が発見したとき、夫はリビングのソファで横になっていたという。息をしていなかった。

夫はすぐに私のつとめる大病院へと運ばれた。キンム中に突然呼び出されたときは、氷水のように冷たい汗が背中をつたった。今でもあの嫌な感觸を鮮明に覚えている。担当医が言うことには、夫は昼寝をしている間にも膜下出血（脳の血管から出血する病氣）を起こし、そのままぼっくり死んでしまったらしい。

裏切られたと思った。住宅ローン（住宅を買うために借りに少しずつ返すお金）をセツパンし、子どもを産み育て、それなりに長い時間連れ添う予定だったのに。一方的に約束を反故にされたような気分だった。

「お父さん、今年はメルと一緒に帰ってくるよね」

「そうね」

④「メル、ちゃんとお父さん連れてきてくれるかな」

「逆じゃない？」

私の目は、スプーンを握る来海の手^{にぎ}に吸い寄せられていた。手の甲^{こう}は少しすじばっていて、関節がしっかりと浮かんでいる。大人の手だ。ついこの前までぼちゃぼちゃのクリームパンみたいだったのに、^⑤ふいにのどの奥^{おく}が熱くなって、涙^{なみだ}がこみあげてくる。

「え、何？ お母さんどうしたの？」

「何でもないよ」

なべと食器を片付けた後、来海はリビングで学校の課題に取りかかる。私は夕飯の買い物に出かけた。帰ってきたら、来海はプリントをテーブルに出しっぱなしにしたままスマホをいじっていて、「終わったの？」を尋ねれば、「今日はもうおしまい」と不機嫌^{げん}そうな声が返ってきた。

「くうちゃん暇^{ひま}なら、一緒にあれ作る？」

エコバッグからナスを取り出してみせる。

「あー、あれね」

食材としてではなく、精霊馬^{しょうりょううま}（お盆に家族や先祖の霊^{れい}があの世界と家を往復するための乗り物として、きゅうりとナスを馬と牛に見立ててかざるもの）を作るために買ったものだ。例年は迎え盆^{むかえぼん}

（霊^{たま}を家に迎える行事）の前日からかざっていたけれど、今年の夏は暑すぎるから、当日に用意しないと野菜がぐずぐずにとけてしまう。

「お庭からきゅうりとってきて」

六月に種をまいた家庭菜園のきゅうりが、ちょうど収穫^{しゅうかく}の時期を迎えていた。少し曲がって不格好。でも太さは一定⁹でキズもなく、つやつや光っている。

メルはよく食べるミニブタだった。料理の音や、えさを皿に移す音が聞こえてくると、勢いよく飛び起きてかけ寄ってくる。こ

の庭の家庭菜園も、メルにたくさん野菜を食べさせるためのものだったが、しかし齢を重ねるにつれてメルの食欲は落ち着いていった。十歳をこえると好物のきゅうりにもがつつかなくなつてだんだんとやせていき、散歩にも行きたがらなくなつた。

夕立がきたので、来海はきやあきやあ悲鳴をあげながらきゅうりを回収し、私はあわてて洗濯物を取りこんだ。

流し台に二人並んで作業を進める。来海はきゅうりの馬、私はナスの牛。わりばしの真ん中に切りこみを入れ、力をこめて半分に折つた。足の長さのバランスを考えながら、短くなつたわりばしをナスのお腹につきさしていく。

ミニブタの平均寿命は十五年ほどと言われる。十一歳で死んだメルは、少し早死にだつたかもしれない。

ブタは繊細な生き物だ。自然環境では群れを作つて生活するため、長時間孤独な状態に置いてしまうとフタンをあたえることになる。夫がいたときは家族で入れかわり立ちかわりメルのそばにいてやることができたが、彼がいなくなつてからはそう上手くはいかなかった。私は一馬力で働かなければならなかつたし、来海も日中は学校に通わなければならない。メルには寂しい思いをさせた。そのストレスで早世したのかもしれないと思うと胸が痛む。

来海はできあがつた精霊馬を手には、怪しげなサイドステップを踏みながら仏間へと向かつた。二人暮らしには広すぎる家だ。バからしくてまたため息をつきたくなる。

仏壇の写真立てには、メルに抱きつく夫の写真が入っている。去年までは夫のピンシヨット（その人一人が写つた写真）だつたのだが、「どうせなら一緒に写つての方がいいよね」という話になつて入れかえた。

そして写真立ての前には、きらきら光る小石のようなものがちよこんと鎮座（場所を占めて）（場所を占めて）（場所を占めて）していた。メル^⑥の骨だ。

動物病院が紹介してくれた火葬場でメルの遺骨をわりほぐしながら骨壺に入れていたとき、突然「骨がほしい！」と叫んだ来海は、火葬場のスタッフに頼んで脚の骨をひとかけらもらつたのだ。遺骨は市内のペット霊園に納骨したが、その小さな骨だけは持つて帰つてきた。

来海は骨をベビーピンクのマニキュア（爪に色をぬるもの）でコーティングして、その上からまた水色のマニキュアを使つて水玉模様を描いた。ファンシーな（デザインや色合いがかわいらしいさま）置き物みたいな見た目をしているが、骨は骨だ。

わりばしをつきさしただけのきゅうりとナスを盆棚ぼんだな（お盆に霊を迎えるためのお供え物をのせる棚）に並べる。来海はどこからかミニカーを取り出してきて、精霊馬の隣となりに並べた。

「またガチャガチャ？」

「こないだ見つけたから回してきた」

「なぜミニカー？」

「予備の移動手段。今年はメルがいるから、きゅうりとナスの精霊馬なんかじゃ駄目だめだよ。絶対かじられちゃう。お父さんの『待て』、メルは絶対聞かないもんね」

来海はピンクの骨に向かって笑いかける。

「メル、寄り道しないでよ。お父さん困っちゃうからね」

来海はいつもこうだ。まるでメルと夫が隣で聞いているかのように、柔らかい声で思ひ出話をする。私は置いて行けないように、必死で笑顔を作る。^⑦

私の夫は、この子の父親は、私たちが語るたびに色濃いろこく脚色きゃくしやくされ、美化されていって、生前よりも好人物になっではないだろうか。メルの毛は、どれほどのかたさだっただろう。

頭の片隅ですつと考えていた。私はどうしてこの子を産んだのだろう、と。私はどうして子どもがほしいと思ったのだろう。

夫に尋ねれば、明確な答えが返ってきたはずだ。だって子どもってかわいいじゃん、とか。

『明日香ちゃんとの子どもなら、世界一かわいいよ』

彼には年の離れた妹と弟がいて、共働きの両親に代わって甲斐B甲斐がしく世話をしやっていたという。子どものいる家が彼の理想だった。

じゃあ私は、なぜ子どもを欲ほつしたのか。「自分の遺伝子を残したい」というような、ゲンシ11的な欲求とは違う。老後の諸々が心配だったから。夫に反対するほどの理由を持ち合わせていなかったから。世間様に取りおくれたくなかったから。どれも少しずつ

当てはまっているようでいて、本当の意味では違う気がする。

たぶん私は、私よりも長生きする話し相手がほしかった。不純なドウキだろうか。¹²

陽ひが落ちる頃に、迎え火（霊を迎えるため）を焚たいた。去年のおがら（迎え火に焚く、麻あさの皮をはいだあとの茎）が残っていたので、玄関先に焙烙皿

（迎え火に使用する素焼きの皿）を置き、その上で焚き木に火をつけた。

熱されたアスファルトが雨に打たれた直後の、甘あまいにおいがする。日がかげつても、何かの前ぶれみたいに外は暑い。来海と私はパピコを半分こして食べながら迎え火を見守った。定番とはほど遠いが、「大人の華やか苺味」のパピコは予想外に好みで、私はこの味が店頭から消える日のおもい悲しくなった。

「結構おいしいのね」

「ね、ぜひレギュラー化してほしい」

冗談じよだんを言つて笑い合つて、未来について腹を割つて話し合つて、時にはたがいに気をつかい、本心を隠かくしたりする。来海とそういうおしゃべりができるようになったのは、つい最近のことだ。宇宙一楽しい話し相手。ようやく出会えたと思ったら、誰だれよりも愛いとおしいその子は進学したり就職したりパートナーと出会ったりして、私のもとを離れていく。

娘の成長はうれしい。でも。世の親たちはみな、このむなしさとともに生きているのだろうか。

「わかった！」唐突とうとつに来海が叫んだ。「メル足あとだったんだ！」

「何が？」

「今朝、あたしのおでこについてた、二つの丸いあと。あれ、メル（ひづめ）の蹄のあとだよ。メルが帰つてきてたんだよ」

親指が退化しているため、ブタの足の指は四本だ。前を向いている真ん中の二本を主蹄しゆてい、両脇りやうわきの二本の蹄は副蹄ふくていという。体を支えるのは主蹄で、副蹄は通常地面につかず、歩行時には使わない。だからブタの足あとは、二つの楕円だえんが横並びになったような形となる。ちょうど今朝、来海の額に残っていた二つのへこみのような。

お盆に帰ってきたメル（れいたい）の霊体がおでこに足あとをつけた、だなんて。まさか本気で言っているのか。

「でも、メルのお母さんはそこまで小さくないでしょ」

「まだ子豚だった頃の足のサイズは、ちょうどあんな感じだったよ。お母さんは知らないでしょ、メルの子豚時代」
冗談を言うときの顔じゃない。来海は真剣にコウフンしていた。何と声をかければいいのか、私はわからなかった。「そうね、メルが帰ってきたんだね」とでも言ってみようか？

来海はしばらく私の目をじっと見つめていたが、やがて居心地悪そうに眉をひそめた。

「お母さん、もしかして答え知ってる？」

「うん、まあ」

「先に言つてよ！ 何？ 何だったの？」

「あれはね、くうちゃんの骨のあと」

来海はますます怪訝な顔をして、「は？」と首をかしげる。

「指の付け根の関節をMP関節っていうんだけど。人差し指と中指のMP関節がおでこに長い間押しつけられていたせいで、そのあとが残っちゃったんじゃないかな」

私は右の手の甲を目の前にかざし、それをそのまま額へと持っていてみせる。

「くうちゃん昔はよくこんなポーズで——腕を上げて、手の甲をおでこにくっつけるようにして寝てたの」

「昔って？ いつ？」

改めてきかれると不思議に思った。来海と寝室は別になっている。長らく寝相は見えない。私はいつの話をしているのだろう。

「もしかして、あたし、そこで寝るときにこのポーズ取ってた？」

来海が指差したのは、庭のウッドテラスだった。

「うん。くうちゃん、そのテラスでよくメルとお昼寝してたでしょ。メルがくうちゃんの脇腹に頭をおしこんでくるから、手の置き場所に困っておでこの上にのせてたんだろね」

「それだよ！」

来海はパピコを勢いよく吸いこみながら、目をきらきら輝かせる。

「やっぱりメルが帰ってきてたんだよ」

サウナの熱波のような、湿気と熱をとまった風が吹いて、焙烙皿から立ち上る煙がオビのようにたなびいた。

「くうちゃんはミニブタ、また飼いたいって思う？」

言った後でしまったと思った。来海は「飼う」という言葉を嫌っていた。「一緒に暮らす」って言ってよ、お母さん。だって家族じゃん。

意外にも来海は怒らなかった。

「飼う——、かあ。最近はね、一周回って飼うって言葉の方が正しい気がしてきたよ」

「なんで？」

「だって、ご飯も掃除も、やってあげないとペットは生きられないじゃん。『これでいい？』って、言葉で確認することもできない。人間じゃないから」

「そうだねえ。確かにメルはペットだけど、でもお母さんはメルのこと、同居人でもあると思ってたよ」

ミニブタは犬と同じくらいかしこい伴侶動物（家族の一員や仲間として）である。社交性もある。汗腺（汗を出す皮）が退化している

ため、体臭がほとんどない。きれいな好きで鳴き声も小さくて、飼いやすい。——これがミニブタの、ペットとしての評価だ。実際、メルはとても穏やかだった。しかし、ペットとして飼うには少し難しい相手でもあった。

体が大きくなるにつれて力も強くなっていった、いいことばかりではなかった。シヨウジに穴を開けられたり、家財道具を壊されたり、電化製品のコードをかみちぎられたこともある。なわばり意識も強くて、家族以外の人間が家にやってくると不機嫌になったり、威嚇したりしていたし。

でも、かわいい。メルはかわいかった。私は一年越しに、同居人の死を悲しんでいた。

「あのー、ひとつご相談があるのですが」

来海がわざとらしくかしこまった口調で切り出してくる。

「何？」

「同じクラスの高野ちゃんっていう子の親戚がね、保護犬カフェをやってるんだけど。そこに十一歳の、ビーグル（犬種の一つ）の子がいるの。——一緒に飼ってくれないか？」

「なんで？」

意図せぬタイミングで言葉があふれた。問いつめたかったわけじゃない。でも、なんで。なんで子犬じゃなくて、わざわざ年老的保護犬を飼いたがるの。

⑨ その子は期間限定のアイスだ。一、三カ月もすればキャンペーン（宣伝活動）が終わって、二度と食べられなくなる。下手したら来海が高校生のうちに死んでしまう。

「言いたいことはわかるよ。『すぐ死んじゃう動物を飼ってもつらいだけじゃない？』ってさ。メルときも、明日香ちゃんはこわい顔して尋ねてきたもんね。『くうちゃんがお姉さんになる前に、メルとは必ずお別れしなきゃいけないんだよ。それでもいいの？』って」

「お母さんそんなこと言ったわけ？」

「言ったよ。覚えてないの？」

全く覚えていなかった。ただ、考えていることは昔からあまり変わらないらしい。

なんで。なんであなたは、自分よりも確実に早く消えてしまうその命をそばに置こうとするの。

「悲しいよ。あたしだって悲しい。お父さんのときもメルときも、もう二度とこんな思いはしたくないってくらいしんどかった」
来海はしほり出すように言った。

「でもね、あたしよりずっと早く死んじゃう子でも関わりたいって思う。いいじゃん、好きになっても。あたしはメルの骨までか

わいって知ってるもん」

娘の成長速度に驚くばかりの日々だ。

夫もメルも、何も告げずに先に行ってしまった。裏切られた。置いて行かれた。取り残された。そうやって私がひとりでぐだぐだど悩んでいる間に、来海はそれを軽やかに飛び越えていく。私はいつも、どうしようもなく泣きたくなる。

「そうねえ。まあ、考えとくわ」

いいじゃん、好きになっても。いつか無に帰すものを愛してはいけないだなんて、誰が決めたの。

来海と私は親子としての適切な距離を測るため、今まさにおたがいを切り離していく段階にある。でもこれは、私も大切に持っていたと思った。

たとえ隣にいらなくても、私は確かにあなたを愛している。すべてが終わって過去になって、ピンクの骨になったとしても。宇宙の藻屑と消えてしまったとしても。

⑩ それならそれで、別にかまわない。

(あらき
荒木あかね『天使の足跡』より)

問1 線部1～15のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 線部A「反故にされた」(7ページ)、B「甲斐甲斐しく」(10ページ)、C「怪訝な顔」(12ページ)とありますが、こ

の言葉の本文中の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「反故にされた」(7ページ)

- ア 強制された
- イ 反対された
- ウ ばかにされた
- エ 忘れられた
- オ 取り消された

B 「甲斐甲斐しく」(10ページ)

- ア ささやかに
- イ 喜んで
- ウ 一生懸命に
- エ やむを得ず
- オ たくましく

C 「怪訝な顔」(12ページ)

- ア 疑問が解消して、晴れやかな顔
- イ 納得がいかず、不思議に思う顔
- ウ 事態が飲みこめず、あわてた顔
- エ いい加減な返答をされ、怒る顔
- オ 予想に反する展開に、悲しむ顔

問3 線部①「損した気分になる」(2ページ)とありますが、それはなぜですか。四十字以内で答えなさい。

問 4 — 線部② 「ここ最近ずつと頭の片隅かたすみに居座いすわり続けていたひとつの問い」(2ページ)とありますが、それはどのような問いですか。「〜という問い」に続く形で、本文中の言葉を用いて二十字以内で答えなさい。

問 5 — 線部③ 「いい傾向けいこうだと思う」(4ページ)とありますが、「私」がそのように考えるのはなぜですか。八十字以内で答えなさい。

問 6 — 線部④ 「メル、ちゃんとお父さん連れてきてくれるかな」(8ページ)とありますが、来海くるみが「お父さんがメルを連れてくる」ではなく、「メルがお父さんを連れてくる」と言っている理由がわかる一文を — 線部④より前の本文中から探し、はじめの五字を抜き出して答えなさい。

問7

——線部⑤「ふいにのどの奥^{おく}が熱^{あつ}くなって、涙^{なみだ}がこみあげてくる」(8ページ)とありますが、その理由として明らかに誤^{まちが}っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 来海の手の変化をまのあたりにして、夫の死後一人で来海を育てた大変さがよみがえり、この先も他人^{たよ}に頼^{たよ}ることなく来海を養^{やしな}わなければならないことに不安を感じたから。

イ 来海が夫の話をしたことをきっかけに夫が亡^なくなったときのことか思い起こされ、来海の成長を感じる今、それを夫と一緒に喜ぶことができないのをさみしく思ったから。

ウ 昔はふつくらとしていた来海の手が大人っぽく変わっていることに意識がひきつけられ、この先来海も成長して自分のもとを離^{はな}れていくのではないかという予感が頭をよぎったから。

エ 来海の話から亡くなった夫のことを思い出したが、来海の手^{しやうぢやう}の成長が象徴^{しやうぢやう}しているように、夫を亡くしてから長い時間が過ぎたことがしみじみと感じられたから。

オ 夫と似ているところがあり、「明日香ちゃん」という呼び方まで真似^{まね}する来海の手を見ると、夫との間に生まれた子どもが立派に成長したことを感じる事ができたから。

問8

——線部⑥「メルの骨だ」(9ページ)とありますが、「メルの骨」についての来海と「私」の考え方の違いを説明したものとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 来海はメルの骨を、メルとの思い出を美化するものとして大切にしているが、「私」は、骨は美しく飾り立てても骨に過ぎず、現実のつらさをやわらげてはくれないと考えている。

イ 来海はメルの骨を、メルがくれた新しい友達のように思っ^て大切にしているが、「私」は、骨はあくまでもメルのものであり、メルと別の存在としては見られないと考えている。

ウ 来海はメルの骨を、メルの思い出として大切に保存しているが、「私」は、骨は死んだメルを思い出させて悲しくなるので、そばに置いておきたくないと考えている。

エ 来海はメルの骨を、かわいらしく飾り立てて大切にしているが、「私」は、骨はいくらメルのものであるとはいえ死体の一部なので、そばに置いておくのは気味が悪いと考えている。

オ 来海はメルの骨を、メルの存在そのもののように思っ^て大切にしているが、「私」は、骨はメルのものとはいえ所詮骨でしかなく、メルの代わりにはならないと考えている。

問9

——線部⑦「私は置いて行かないように、必死で笑顔を^{えが}作る」(10ページ)とありますが、この表現から読みとることができる「私」の心情の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分勝手に夫やメル^のの過去を語る来海に対して「私」はうんざりしているものの、父親や愛するベットの死を乗り越えられないでいる娘の弱さをおおらかに受け入れようとしている。

イ 夫やメル^のの死を依然^{いぜん}として受け入れられないでいる「私」は、楽しそうに思い出話をする来海^のの機嫌^{きげん}を損^そなってしまうことのないように、あえて明るくふるまおうと努めている。

ウ 亡くなった夫とメル^ののあの世での様子を夢中で語る来海^のの想像力に「私」は圧倒^{あつう}されながらも、話の展開がわからなくなること^をを心配して来海^のの話を集中して聞こうとしている。

エ 来海と異なり、亡くなった夫やメル、また彼ら^{かれ}の思い出と素直に向き合うことができないでいる「私」は、来海にそのことを悟^{さと}られないようにしようと調子を合わせている。

オ 亡くなった夫とメル^がが仲良くする姿を想像し、平静を装^{まも}おうとする来海を見て、高校生なりに自ら逆境を乗り越えようとする来海^のの姿勢に、「私」はいじらしさをおぼえている。

問10

——線部⑧「でもお母さんはメルのこと、同居人でもあると思ってたよ」(13ページ)とありますが、「私」がそのように思ったのはなぜですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

アメルは世話をしなければならぬという点でペットではあるが、基本的には飼いやすいという評判のミニブタであり、全く面倒をかけられることなく、気分よく生活することができたから。

イメルは自分よりも先に死んでしまうという点でペットではあるが、飼いやすいという評価のミニブタにしては、気性が荒いところがあり、だからこそそれが個性的でかわいいとも思えたから。

ウメルは人間の手助けなしで生きられないという点でペットではあるが、評価通りではない飼いづらい側面もあり、それも含めてかけがえない存在としていつくしむことができたから。

エメルは言葉が通じないという点でペットではあるが、飼いやすいという評判とは異なる困った行動にも意味があり、言葉を交わさなくても気持ちを通わせることができたから。

オメルは飼い主の思い通りに行動してくれないという点でペットではあるが、それでも飼いやすいと評判のミニブタであり、飼うのが難しい動物に比べるとまだかわいく思えたから。

問11

——線部⑨「その子は期間限定のアイスだ」(14ページ)とありますが、「その子(年老いた保護犬)」と「期間限定のアイス」とはどのような点が同じだといえるのですか。三十字以内で答えなさい。

問12

——線部⑩「それならそれで、別にかまわない」(15ページ)とありますが、「私」がそう思うようになったのはなぜですか。本文全体をふまえて、百十字以上百三十字以内で答えなさい。

Pさんは、この文章を読んで「お盆」について調べてみました。調べたことをまとめたのが次の【ノート】です。

【ノート】「お盆」とは何か？

○目的…亡くなった家族や先祖の霊を家に迎えて供養する。

仏教の行事「盂蘭盆会」からきたもの。

○時期…8月13日～16日

(ただし地域によって異なることがある。)

○具体的内容…

・「迎え火」を焚く

13日夕方に家の前で、焙烙皿の上でおがらを燃やし、

「迎え火」を焚く。これによって家族や先祖の霊を迎える。

・盆の期間中

盆棚にお供え物をする。

法要を行ったり、親族で会食をしたりする。

また、寺の境内などで盆踊りを行うこともある。

・「送り火」を焚く

16日に「迎え火」と同じやり方で「送り火」を焚き、家族や先祖の霊をあの世に送る。

※「精霊馬」と呼ばれる動物を作り仏壇の近くに

置く。

・きゅうりの馬

家族や先祖の霊がああ世から帰ってくる時に乗るもの。早く帰ってきてほしいので足の速い「馬」を用意。

・ナスの牛

家族や先祖の霊がああ世に戻る時に乗るもの。ああ世へ戻るのは遅い方がいいので、歩みの遅い「牛」を用意。



問題

Pさんの【ノート】の内容をふまえ、生徒たちが本文の内容について話し合いました。本文の六つの……線部について述べた生徒の意見のうち、本文に対する解釈として適切でないと考えられるものを二つ選び、P～Uの記号で答えなさい。

Pさん…今回お盆について調べてみて、「夕方はメルとお父さんのお迎えするんでしょ？」（4ページ）と「私」が言っているのが、彼らの霊が帰ってくるのを迎えるということだとわかったよ。お盆は家族や先祖の霊を迎える行事だから、「私」と来海はメルのこと家族の一員だと思っているのが伝わってきたな。

Qさん…なるほどね。来海は「最近牛肉や鶏肉もほとんど口にしない」（6ページ）とあるけれど、お盆になって、家族や先祖の霊を迎えてくれる精霊馬にあたる牛を食べてしまうと、メルとお父さんが帰ってこれなくなってしまうと心配していたんだろうね。

Rさん…「来海はできあがった精霊馬を手には、怪しげなサイドステップを踏みながら仏間へと向かった」（9ページ）というところからは、来海が二人の帰りを楽しみにしている様子も伝わってきたよ。家の中で歌ったり踊ったりする陽気な来海らしいよね。盆踊りも楽しみにしていそう。

Sさん…来海といえば、「来海はどこからかミニカーを取り出してきて、精霊馬の隣に並べた」（10ページ）という変わったことをしているのも面白かったね。きゅうりやナスだとメルは食べてしまうと、お父さんはメルを止められない、ということ彼らのことをよく理解した上での行動だよな。

Tさん…「やっぱりメルが帰ってきてたんだよ」（13ページ）というところでは、「私」がおでこのあとはメル足あとではなく来海自身の関節のあとだと指摘したのに、来海は、メルが自分の脇にいたからそういう姿勢をとったのだと喜んでいたらね。来海は言葉通りメルがお盆に帰ってきたと思っていたんだね。

Uさん…「私」にとってもお盆は意味があったといえると思う。「私は一年越しに、同居人の死を悲しんでいた」（13ページ）とあるから、「私」も来海と一緒にお盆という行事を行う中で、メルを亡くした悲しみやメルへの愛情をあらためて感じることができたんじゃないかな。

